

都道府県別賞一等

祖父からの黄金言葉（くがにくとうば）

沖縄県 西原町立西原中学校 二年生

城間 創太

「こんな遅くまでぬっそうが（何をしているんだ）。」私はバツが悪くて、祖父の方を見ずに「明日、地理のテストがあるんだ。」と伝える。「もっと早めに勉強してればいいのにさあ。」予想通りの返しは耳が痛い。前もつてやつておけば良かった事は、言われなくてもわかっている。そんな正論に反発しないほど私は大人ではなかった。

ただ唯一の救いは母のとは違って祖父の説教は何といっても短い。これはとてもありがたいのだ。そしてもう一つ。かなりの高確率で次の言葉が組み込まれるのだ。

「畑作（ハルチュク）てい、節待（シチマ）てい」その時の私は意味を尋ねるほど素直ではなかった。説教のおかわりは望んでいなかった。「もうわかったから、あっち行ってくれ。」これが祖父と私のルーティーンだった。

二〇二五年の春、祖父の左目の下に赤いアザができた。眼科への通院をくり返したが一向に良くなり、皮フ科など四つの病院を経由して大病院が下した病名は「成人T細胞白血病」、血液のガンらしい。親族のあわてぶりに比べて本人はいたって冷静であった。先が心配ではないのかと僕も心配した。

二〇二五年春、治療を開始する。抗ガン剤と聞いて、十四年の私の人生で「死」というものがまわりついてくるのを感じた瞬間であった。

夏休みに入り、祖父の日常がよく見えるようになる。病気前と変わらず、ソフトボールをプレイする姿を見ると、何もなかったのではと、さっ覚してしまう。ただ私の不安は常に限定的だったのだ。

夏休みを通して私は祖父の一日が見られるようになった。そこである時、私の心のモヤモヤの原因を祖父に尋ねた。平常心を保っているフリをしながら。「そういうえば、この病气って治るよね。」さらに続ける。「お金はどのくらい、いくらにかかっているの。（お金は）足りているの。」その時、祖父は「なんくる（ないさあ）」の言葉だけを發した。なぜかその言葉に祖父の自負を強く感じたのだ。

私のモヤモヤの残りを祖父にぶつけると、「病気はきつと治るさあ。お金も、保険もばんない（いっぱい）入っているから大丈夫よお。」と、私に伝えてくれた。間を置かずに祖父は続ける。「年金保険に、ガン保険、介護保険、損害保険にそして……。」祖父のその姿はモヤモヤをはらしてくれた。「保険に加入

第63回中学生作文コンクール

している。」それは祖父だけでなく祖父を含めた親族までも力強く支え、共にたたかう、たたかってくれる同志に感じた。だから祖父は冷静でいられたのかも知れない。

「畑作（ハルチュク）てい、節待（シチマ）てい」意味は畑をしつかり耕して植え付けの時期（節）を待つ。つまり「備え」の重要性を伝える言葉だと私は後にわかるのだった。祖父はまさにこの言葉を体現して私に示してくれた。何も地理のテストだけにあてはまる言葉ではなかった。

私は祖父から聞いた「黄金言葉（くがにくとうば）」を貴重な教えや教訓として受けとりこれからも大切にしていきたい。